



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円

道標



巡礼指定教会にザビエルと聖心

信仰年の免償についての教区規定

一九六七年以来二度目の「信仰年」(十月十一日) 来年十一月二十四日)にあたり、教皇庁内赦院は十月五日(金)に信仰年に際して与えられる特別免償についての教令(九月十四日付け)を發布した。これを受けて郡山司教は、鹿兒島教区における免償についての次のように解説している。

九月にバチカンから発表された決定に基づき、鹿兒島教区でも次のとおり免償が受けられるものとします。そのためには以下の条件が満たされなければなりません。

二〇一二年十月十一日から二〇一三年十一月二十四日まで開催される「信仰年」の間、心から悔い改め、ゆるしの秘跡を

受け、聖体を拝領し、教皇の意向(注1)に従って祈るすべての信者に、犯した罪に対する有限の罰(注2)に關して神のあわれみによる全免償が与えられます。この全免償は亡くなった信者の靈魂の安息にも適用されます。全免償は以下の条件のいずれかを満たすたびに得られます。

- ①「信仰年」の間に行われる説教を少なくとも三回聞く。あるいは、教会堂やふさわしい場所で行われる「第二バチカン公会議公文书」あるいは「カトリック教会のカテキズム」に関する講話を少なくとも三回聞く。
- ②カテドラル、あるいは名瀬聖心教会を巡礼の形式で訪れ、ミサあるいは聖体賛美式に参加するか、あるいは、ある程度の時間、敬虔に黙想し、終わりに主の祈りと正式な形式での信仰宣言と聖母マリア、聖フランシスコ・ザビエルの取り次ぎを願う祈りを唱える。
- ③キリストと聖母マリア

の祭日、使徒や守護聖人の祝日、ペトロの使徒座の祝日のいずれかに、ミサあるいは聖務日課に敬虔にあずかり、信仰宣言を唱える。

④「信仰年」の間、自由に選んだ日に、洗礼堂または他の洗礼の秘跡を受けた場所を敬虔に訪れ、信仰宣言をして洗礼の約束を更新する。

⑤教皇の祝福と全免償を敬虔に受けたいと望むすべての信者はそれを、カテドラルと名瀬聖心教会において、二〇一三年五月十九日の聖霊降臨の主日のミサと二〇一三年十一月二十四日の王であるキリストの祭日の信仰年閉年ミサで受けることができる。

たとえば、高齢者、病者、また病院や保健施設で継続的に保健活動に従事する人で、重大な理由からミサや祭儀に参加できなくても、

信者の生き方を再確認

今年の福者レオ七右衛門殉教祭

薩摩の殉教者・福者レオ税所七右衛門(一五六九〜一六〇八年)の殉教を記念し、その強い信仰を本としようとする「福者レオ七右衛門殉教祭」が十一月十八日(日)薩摩川内市の京泊教会跡地と川内教会などで開催された。

が、今回は初めて九州管内の教会にポスターを配布するなど広報活動を行った。そのためか数は少なかったものの長崎や福岡、宮崎からの参加者の姿も見られた殉教祭となった。

参加者たちは、午後一時からレオ七右衛門が受洗した京泊の教会跡地で祈りをささげ、レオの洗礼への決意を偲ぶと共に当時この地



交差点で祈る参列者たち

で働いたドミニコ会の司祭たちの功績に感謝した。その後は会場を川内教会

に移し、午後二時半から記念祭第二部を行った。第二部では教会前に建てられた殉教記念碑に郡山司教が献花し、また聖水を散布するセレモニーがあり、その後午後三時から聖堂でミサがささげられた。

郡山司教と十七人の司祭、三人の助祭でささげられたこの日のミサには百九十人の信徒が参列、司教の「信徒としての生き方」についての説教を聞いた。郡山司教は「洗礼によって神からとっておかれた私たちが聖体拝領の際に発する

心から悔い改めるなら、同じ条件のもとに全免償が与えられる。ただし、教区司教の言葉をインターネットで聞くときに、その場にいる信者と思いと心をついにし、自分の生活の苦しみと不自由をささげながら、主の祈りと信仰宣言および「信仰年」のための祈りを唱えなければならぬ。

注1 教皇と心を合わせるとい意味で、具体的に

心から悔い改めるなら、同じ条件のもとに全免償が与えられる。ただし、教区司教の言葉をインターネットで聞くときに、その場にいる信者と思いと心をついにし、自分の生活の苦しみと不自由をささげながら、主の祈りと信仰宣言および「信仰年」のための祈りを唱えなければならぬ。

注2 有限の罰に關しては新カトリック大事典第四巻の記事が参考になる。「罪は赦しを得て神との交わりが回復されても、なおその結果としての有限の苦しみ(罰)が残る。」(九三八頁)とあるように、「有限の罰」というのは神が与える罰ではなく、人が罪を犯すことによって生じる自分の有限の苦しみ(罰)という意味。

教区評での意見実現のために

本土地区臨時コンベンツス

十一月六日(火)教区本部で、本土地区で働く司祭たちによる臨時のコンベンツスが開催された。この日の会議は教区評議会での提案を具体化するために先月(十月二日)急遽開催された本土地区司祭評議会の報告を兼ねたもので「教区評議会を受けて小教区ではどのような試みができるか」が議題となった。

会議でははじめに臨時司祭評議会から出された提案及び教区評議会のまとめの

資料についての説明がなされたほか、郡山司教から祈りのグループ「愛の泉」について説明とこのグループが中心になって実施された徹夜祈禱会(聖体礼拝)についての報告があった。加えて司教は、信仰年の間にもう一度徹夜祈禱会を実施したいとした。

また司教からは新たな提案として、子ども大会としての「子ども聖書学校」の開催、所属信徒の結婚記念日を小教区で祝うこと、家族単位での聖体訪問、また教区の宣教を進めるために「宣教推進委員会」を設置

考える必要はない。

注2 有限の罰に關しては新カトリック大事典第四巻の記事が参考になる。「罪は赦しを得て神との交わりが回復されても、なおその結果としての有限の苦しみ(罰)が残る。」(九三八頁)とあるように、「有限の罰」というのは神が与える罰ではなく、人が罪を犯すことによって生じる自分の有限の苦しみ(罰)という意味。

- ④ロザリオの祈りを積極的に行う。
- ⑤信仰年にあたり土曜日のミサを「洗礼志願者」のために行う。
- ⑥中高生の「長崎巡礼」の広報に力を入れる。
- ⑦ミサのクレドを信仰年の間、ニケア信条を唱える。
- ⑧信仰年の間の「全免償」については郡山司教が執筆し教区報十二月号に掲載する。
- ⑨子ども大会を来年開催することとし、泉、石田両師に、その具体案を任せる。但し各主任司祭も積極的なかわりを持つ。
- ⑩本土地区「宣教推進委員会」の構成は、本土地区司祭評議会に信徒を加えることとした。

ザビエル書院の窓

【今月の一冊】
米田彰男著
「寅さんとイエス」
筑摩書房 定価1,700円+税

2013年のカトリック手帳、カレンダー各種取り揃えてあります。またクリスマスに大切な方々にメッセージを送りませんか? ザビエル書院にはメダイやご像のほか、すてきなクリスマスカードやご絵も豊富です。

父・猿喰哲夫の生き様を振り返って 優しく強い信念の人でした

父・パウロ猿喰哲夫は、昨年十二月から肺がんの治療をしておりましたが、その甲斐なく、十月十五日（月）八時三十分にて七十四歳と三日の人生を終え、帰天いたしました。

生前は仕事の関係で県内たくさん地域を家族とともに移動し、それぞれの地域の教会で多くの信者の方々と交わりを持ちました。本来ならば、私どもが各教会に足を運び、ご挨拶しなければならぬところですが、勝手ながらこの場をお借りしましてご報告させていただきます。

父は東京での抗がん剤治療を終え、六月に鹿児島へ戻って参りました。その後

三か月は自宅療養をしておりましたが、九月初旬から腫瘍熱が三週間ほど続き、その治療のため国立南九州病院に入院することになりました。

その一週間後には高カルシウム血症のため意識障害に陥り大変危険な状態になりましたが、奇跡的に意識を回復いたしました。その様は私たち家族に改めて父の精神力の強さや信仰の強さを感じさせるのに十分なものでした。

その後父は一日一日をとても大切に生きていくように感じられ、ケアしてくださる看護師の方々一人ひとりに、かすれた声で笑顔を浮かべ感謝の言葉をかけ、また自分の病気を押しお

見舞いに訪れてくださった方には、自分の体を大切にするように励ましておりました。

常日頃の父の他者との触れ合い方であるにもかかわらず、そのとき初めて父が大切にしていた姿勢を目の当たりにした気がいたしました。

生前の父は強い信念を持ち自分にも大変厳しい人でありましたが、他者に対しては分りにくくはありましたが深い優しさを持っており、それゆえその優しさは他者をどこまでも満たされた気持ちにさせてくれました。父はまさにパウロの如く力強くこの世で自分の態度でもって神様の教えを体現していたのだと思います。

神様の道具として、また私たち家族の父親として精一杯に一生懸命に力の限り

生き抜いた父の最期の顔はすべてをなした終えた者の本当の安らぎに満ちたものでした。

私どもは父の死を通して、最後に最高の教えを受けてもらいました。これからの人生をカトリック信者として、父を手本に歩めることは私どもの誇りです。

次に皆様にお会いするとき、私どもの姿に父がともにいるよう精進してまいりたいと存じます。長々と失礼いたしました。

カトリック始良教会
猿喰ツタエ
娘一同



降誕祭をお祝いするにあたり、なぜ神様は人間となつたのか、ということを考えてみることも必要かと思われまます。このように書き始めると、何か難しい神学的な話が展開されるように思われるかもしれませんが、肩の力を抜いて考えてみましょう。意外なところにヒントがあるものです。

数年前、パウリンガルとミヤウリンガルという玩具が発売されました。これは、犬や猫の鳴き声を分析し、彼らの感情を教えてください、というなかなか面白い

＝新刊の紹介＝

坂本陽明（進） 著
長編時代小説
「キリシタンの世紀ー
シドッチと新井白石」
イーピックス出版 1,500円

フリーピンからこんにちは！ 神学生の貴島です！頑張っています！



いつもお祈りありがとうございます。神学生の貴島です。

マニラのサン・カルロス神学院で神学科二年を終え、今年の六月から聖ヨハネ・マリア・ヴィアンネ小教区で実習させてもらっています。主任司祭はジミー神父様。この小教区の誰よりも元気な神父様です。中国からのピーター神父様を助任司祭として二人の司祭が二つの巡回教会を持つこの小教区に配属されています。

私の主な役割は、小教区で行われる朝晩の祈りの朗読とその後一分程度自分の

つたようです。さて、確かにこれはこれで非常に優れた物なのですが、人間の気持ちを犬や猫に伝える機械を人間は決して作ることはできません。

スーさん（鈴木助祭）のやさしいみことば

神様の言葉と 思いを知る

彼らの行動が不思議に思えることもあるでしょう。こうした思いや悩みに応えるべく開発された玩具ですから、飼い主にとってはまさに夢のアイテム（道具）だ

なぜなら、人間は動物よりも上位に位置する存在だからです。つまり、上位にあるものは下位のものを理解できて、下位のものは上位にあるものを理解するこ

と今思い出すと大変だったような気がしますが、みんなを畏れ、感謝していたので自分も感謝しています。

この小教区の十周年にあたる八月四日のヴィアンネの記念日のミサでは、先日枢機卿になられたタグレ大司教様が司式されました。私も本持ちとして奉仕させてもらいました。大司教様が帰られる時、「あのお方の衣の裾にでも触れることができれば」という気持ちでフリーピンの慣習に従って祝福を求めたところ、笑顔で「ありがとう、ブラザー」というお言葉が…。

「覚えていてくださった」のです。「主よ、もう思い残すことはありません。今こそ僕をあなたのもとへ旅立たせてください！」と祈ったのですが、「まだ来るな！」ということなので、「はい」頑張ります。

この小教区で実習するチャンスやこの召命を続けることにも関わっていることに郡山司教様をはじめ両親、皆さんに感謝しています。引き続きお祈りよろしくお願

は、私たちをご自分の子どもとして永遠の幸福にあずからせるためなのです。まさに、イエス様は私たちのために「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられた」（フィリピ2：6-7）。

ここに神様とイエス様の愛の一端が窺い知れます。この愛に気付くことが私たちが真のキリスト者にしていく

文芸

短歌
大笠利教会 稲 牛憲
立ち上がる時無意識に出ずる声吾が主よ主よと言へないものか

鴨池教会 前田 儀子
ゆく雲のきのふの雲とは違ふ雲芒の原に存分に風吸ふ過去帳の家族の忌日表を書く雲つぎつぎに輝く昼を

鹿兒島純心 川上 和
つながられる皆つながられるぶどうの木つきせぬ命信仰の絆

奄美市 林 常広
お御堂に色とりどりの匂ひある霜月の花死者への祈り

愛光園 春山マリ子
死も近い自分を励まし最後なるやはり寂しき隠せぬハート

俳句
鹿兒島市 徳永ノブ子
アヴェマリア祈る心の秋深し
シスターの著書に感激文化の日

霧島市 政 ノブ子
秋晴に賛美歌ながれ結婚式
鹿兒島純心 川上 和
秋さくら祈る小道をついて来る

純心学園 山頭 信子
刀豆の枝に垂れたり強さかな

ポケットにロザリオつむぐ信仰年
出水市 沖 弘子
ロザリオを唱ゆひと日の秋

愛光園 春山マリ子
天井のイルミネーション夢誘う

誘う

希望の星学園が南海文化賞受賞

奄美における障害児福祉の先駆けとして

奄美大島は龍郷町赤尾木にある社会福祉法人クリスト・ロア会経営の知的障害児施設「希望の星学園」(田下哲朗施設長)が、第三十六回南海文化賞(福祉部門)を受賞した。



南海文化賞を受けた希望の星学園の関係者たち

南海文化賞は大島群島の有力紙「南海日日新聞」の取材をもとに、同新聞社社長との諮問機関「南海文化賞選考委員会」等を経て受賞者が決められるもの。

希望の星学園は、一九六六年開所以来、奄美における障害児福祉のパイオニアとしての功績が認められ今回の受賞となった。

知的障害児を抱える親たちの要望を叶えるため奄美の父と呼ばれたゼローム神父(コンベンツアル会)が立ち上がり一九六六年七月に開所させた同学園は、以来四十六年もの間、障害児(者)の自立を支える事

死者のために祈る

カトリック唐湊墓地でミサ

十一月三日(土)カトリック唐湊墓地で死者のためのミサがささげられた。午前十時から郡山司教と寝占、アン、サントスの三司祭と桃菌助祭によってささげられたこのミサに参列した約五十人は信徒や修道者など約五十人。参列者たちはミサの最後に血縁者や知り合いの墓に花を手向け、清掃するな



ど故人と心の交流のひとつを持ちたい。司祭墓地前でささげられたミサで説教した司教は、この日の朗読からパウロの情熱とまたザビエルが愛した祈り「十字架の上のキリス

「苦しみ悩む人のたちの声」を聞く耳になろう」と鹿児島教区で始めた鹿児島きぼうの電話(山口寛子委員長)では、今年の相談員養成講座を終え、十一月十六日(金)夜、教区本部で修了式と認定式を行った。今年で二十五回目となった同養成講座だが、今回は受講者が少なかったため、事務局では相談員になる人が誕生するか心配したそうだが、幸いにほぼ例年並みに九人が養成講座を修了し、その中の六人が相談員として働く決意を示してくれたという。相談員の数不足は十分とは言えない同電話の活動だが、それでも彼らの努力で大勢の人々が安らぎを得ている。

ものとなっている。十一月一日(木)奄美市のホテルでの南海文化賞贈呈式には、希望の星学園・田下哲朗施設長や寺田公子理事長(クリスト・ロア会)らが出席した。席上挨拶した田下施設長は、学園創設にかかわる恩人たちを振り返りながら、彼らが目指した「この子らを世の光に」という目標に向けてますます頑張りたいと語った。

短 信

▼スピリチュアル研修会
十月二十日(土)教区本部でスピリチュアルケアの実践についての研修会が開かれ、約二十人が出席し、講師のレデンプトル会鹿児島準管区長の盛克志神父から熱心に勉強した。

▼不來方高校合唱部が献歌
鹿児島で第六十五回全日本合唱コンクールが開催されたのは十月二十七日のこと。その前日に同大会に出場する岩手県立不來方高校音楽部の部員約四十人がザ

踊って皆で宣教

おはら祭りに参加

第六十一回おはら祭り(十一月二日、三日)の夜の踊り連約八千七百人が参加した。

二日(金)午後七時半から始まった総踊りの踊り手たちの中には、カトリック鹿児島司教区のプラカードに続く約四十人の信者たちの姿があった。「ザビエルの熱き思い」を伝えようと仕立てた法被を身にまとった信者たちの踊りは、いづる交差点から始まり約一時間半、決して大きくはない



集団ながらも「これも宣教のひとつ」と精一杯の踊りを披露。そしてもちろんその中には郡山司教、牧山神父の姿もあった。

+KABAYAN SEKSIYON+ "PAGLALAHAD"

Kinakatigan ng doktrinang Katoliko ukol sa paglikha na: 1) ang daigdig at ang lahat ng naririto ay nagmumula sa mapag- Mahal na kapangyarihan ng Diyos sa siyang *pinaka-Pinagmulan, Naghabari, at Hantungan*; 2) lahat ng nilikhang bagay at kasaysayan ng sangkatauhan ay may kahulugan, layunin, at patutunguhan; at 3) ang buhay ng bawat tao ay hindi isang "pansariling" pag-aari, kundi nilikha, itinataguyod at ginagabay ng ngayon ng mapanlikha, mapanligtas na kalooban at pag-ibig ng Makapangyarihan ng Diyos. Ang Paglikha ang saligan ng mapanligtas na plano ng Diyos at ang simula ng kasaysayan ng kaligtasan na nagtatapos kay Kristo. Ang pahayag ng paglikha ng Diyos sa lahat ng bagay ay hindi maihiwalay sa pahayag ng katuparan ng Kanyang Tipan sa kanyang bayan.

I. Manlikha
Maaring ang pagiging "Manlikha" ang pinakabatayang larawan na mayroon tayo tungkol sa Diyos. Ihiniwalay nito ang Diyos sa lahat ng iba pang mga nilikhang bagay bilang *natatanging Katotohanang Di-Nilikha*. Gayundin, iniugnay nito ang Diyos sa bawat tao, pook o bagay bilang *Unang Sanhi* ng pag-iiral. Kung gayon, ang Diyos na Manlikha ay parehong nakahihigit (di-maabot) sa lahat ng Diyos na nilikha, bagama't malaganap (nanaanatili) ito na, lagging nagtataguyod nito sa pag-iiral. Ngunit ang Manlikha na ating ipinapahayag sa pamamagitan ng pananampalataya sa Kredo ay hindi lamang isang Unang Sanhi na bunga ng katuwiran. Siya ang mapanligtas na Diyos ng tipanan. Kayat inaaawit ng Salmista: "Sa daigdig, ikaw, Panginoon, kay rami ng iyong likha, pagkat ikaw ay marunong kaya ito ay nagawa. Sa dami ng nilikha mo'y nakalatan itong lupa" (Salm 104:24). At "nawa'y pagpala in kayo ng Lumikha, ng Diyos na lumikha ng langit at lupa; magmula sa Sion, tanggapin ang pagpapala" (Salm 134:3). Gayundin inilalahad ni propeta Isaias ang orakulo ng Panginoon: "Akong Panginoon, na iyong Tagapagligtas, ang lumikha sa iyo, ako ang lumikha ng lahat ng bagay" (Is 44:24). Sa higit na mabisang paraan, ipinahayag niyang muli: "Ang Panginoon, ang Diyos, ang lumikha ng kalangitan, Siya rin ang lumikha ng daigdig, ginawa Niya itong matatag at ito'y mananatili... Siya ang may saging. "Akong Panginoon lamang ang Diyos at wala nang iba pa... Lumapit kayo sa Akin at kayo ay maliligtas, kayong mga tao sa buong daigdig. Walang ibang Diyos maliban sa akin" (Is 45:18, 22).

Ang Banal Na Santatlo Ang Manlikha
Tuwirang iniugnay ng Kredo ang "Manlikha" sa "Amang Makapangyarihan." Naging sanhi ito sa sobrang simple at maling ideya na ang Ama lamang ang lumikha (at ang Anak lamang ang tumutubos, at ang Espiritu Santo lamang ang nagpapabanal). Ang totoong itinaturo ng Pananampalatayang Kristi yano na lahat ng tatlong Banal na Personal ay kumikilos nang sama-sama bilang ISANG DIYOS sa paglikha, pagtubos at pagpapabanal. Kinakatigan natin dito na ang Diyos Ama ay lumikha sa pamamagitan ng Kanyang Anak, na si Jesu-Kristo, sa kapangyarihan ng Espiritu Santo.

Katekismo-Pilipinong Katoliko (Fr. Dino Orloff)

12月の会と催し

- 1日(土) 丸野神父と読む「ヨハネによる福音書」・教区本部・16時
- 2日(日) 待降節第一主日
- 3日(月) 加世田聖母幼稚園五十周年記念式典
- 3日(月) 聖フランシスコ・ザビエル司祭
- 7日(金) 小川靖忠神父叙階記念(一九七二年)
- 7日(金) 中野裕明神父、丸野六雄神父霊名
- 8日(土) ヴィンデンマン神父命日(二〇〇六年)
- 9日(日) 無原罪の聖マリア
- 9日(日) 待降節第二主日
- 16日(日) 鹿児島市民クリスマス・ザビエル教会・18時
- 16日(日) 待降節第三主日
- 17日(月) 宣教学校・ザビエル教会集会所・13時30分
- 17日(月) ホリステイック聖書講座「マタイ二十四、二十五章 黙示と預言を説く」・ザビエル教会集会所・10時・五百円
- 20日(木) 大野和夫神父叙階記念(一九六一年)
- 20日(木) 待降節第四主日
- 23日(日) 松永正男神父叙階記念(一九六九年)
- 23日(日) オリブの会・教区本部・14時
- 25日(火) 主の降誕
- 26日(水) 聖ステファノ殉教者
- 27日(木) 聖ヨハネ使徒福音記者
- 28日(金) 田邊徹神父、寝占敦之神父、山口好信神父、ドゥン神父霊名
- 28日(金) 幼子殉教者
- 30日(日) 教区本部仕事納め
- 30日(日) 聖家族
- 24日(日) 【ノベナの意向】洗礼の恵みを受けた全信者のため(16)

十月と十一月に看護と医療の学会に参加させて頂きました。また、補足として台湾社会の宗教と医療、社会活動を結合させた運動についてもご紹介し、鹿児島教区の宣教推進への一助にさせて頂ければ幸いです。

1 ナイチンゲール学会

看護の学会「ナイチンゲール学会」では「ナイチンゲール」とホリスティック看護」という題で、発表させて頂きました。

看護の歴史は、有史以来あります。近代看護の母であるナイチンゲール以前には、看護は主に修道院でシスターによりなされておりました（この十月に、教皇さまから教会博士に挙げられたビンゲル（独逸）の聖ヒルデガルド「一七九九年没」は、医者であり看護婦でした）。またそれまで看護婦の仕事は、一般社会においては身分の低い無学な下女の仕事とされておりました。ゆえに良家の子女であったナイチンゲールが看護婦として働くことになった時、それはそれは大きなセンセーションを起さずにはおかなかつたのです。

彼女の名前を、フロレンスといいますが、それは富裕な両親が新婚旅行で、欧州各国を二年間まわった時、イタリアのフロレンツエ（英語でフロレンス）で生まれたといわれています（一八二〇生まれ、一九一〇没）。

彼女は従軍看護婦としてクリミア戦争に参加し、看護のあり方を身をもって示すと共に看護婦の社会的地位の向上のために

も、生涯を捧げました。そして当時の慣習であった慈善と献身をもって修道院のシスターが主に行うとされていた病人の看護システムから、看護技術を持ち、よく訓練された職業婦人である看護婦が病人の看護に当たるべきではないかと彼女は考えたのです。かかる看護婦の養成と看護婦制度の確立のために、ナイチンゲールは頑迷な官僚的権威主義及び社会的偏見と闘い、遂に看護婦の社会的地位の確立と看護婦養成のための教育制度を確立させるに至らせたのです。

彼女は著作『看護覚え書き』の中で、看護の基本について、こう語っています。「訓練なしに規律と献身の姿勢だけで、近代の病院

医療と看護の学会に参加して

溝辺教会主任司祭

坂本 進

看護を持ちこたえることは、できません」カトリックの宣教も訓練が必要ではないかと思えます。

「看護とは、病人の身体的看護だけではありませぬ。新鮮な空気、陽の光、暖かさ、静かさ、清潔、適切な食事、気分転換などを与えること。また、その人らしさを尊重することが必要です。病人の回復、健全な心の成長のために、最もよい状態・環境にその人を置くことが必要なのです」

百年も前にナイチンゲールは、看護・介護とは、身体のお世話だけではなく、環境の整備、心のケアが、合いまってなされるものであることを洞察していたの

です。そのナイチンゲールの看護精神を支えたもの、それはキリスト教の信仰にほかなりません。彼女が、十六歳の時に「神に仕えよ」という神からの呼びかけ（召し出し）を聞きまし。そして二十四歳を目前にした時に「自分にとって、神に仕える道は、病人の看護である」とを悟ったのです。

彼女は、次のような信仰の証しを「ナイチンゲール書簡集」の中で、記しています。「病人の間で働く生活と仕事、それが他ならない祈りとなるのである。祈りは、神との語り、協働であり、病人に仕えることを通して、よりよく神に仕えることが出来るのである」

「私たちの内にある善の源泉である良心、その声を通して神は私たちに話しかけておられる。看護の場において、私たちは神を静かに思い、すべてのことを神に委ねよう。そのように、神は私たちを導いておられるのだ」

「看護は、神からの最高の贈り物である生と死と、聖霊の宿る神の宮である肉体にかかわるものである。ゆえに、看護は、神の栄光のために、始められ、続けられ、終えられていくものでなければならぬ」

「素晴らしい女性であることと、素晴らしい看護婦であることは、合致している」

「看護を職業とすること、それは、キリスト者として生き

ることに合致している」キリスト教信仰と看護・介護との関係をもっとつなげていけたらいいですね。学会の発表は、さらに、現代の看護教育のキャリアキュラム、ナイチンゲールの看護への認識、ナイチンゲールの紹介の歴史などがなされ、有意義な時がもたれました。

2 ホリスティック学会

もう一つの学会である「ホリスティック医学学会」のことについてご紹介させて頂きたいと思えます。

医療の学会組織の一つであるホリスティック医学協会は、一九八七年に創立され、現会長は川越三敬病院長の帯津良一先生です。ホリスティック医学は、医

療にとどまらず、生き方そのものを問題とし、自分らしく生きることを目指しています。これはナイチンゲールのスピリットと軌を一にさせています。生き方であるゆえに、健康で生きることと病んで生きることとの間には、実は境界などはない、そうホリスティック医学は捉えているのです。医療は、人間の有史以来、工夫・研究がなされ、その進歩には目覚ましいものがあります。治らなかつた痛・結核なども治るようになり、長寿を得ることもできるようになったことは、この証左です。学問的にも臨床的にも驚くべき発展があります。しかし、他方で、問題も提起されています。それは、いったん病気になる

るとなかなか治らなく、通院が長引くようになってきたこと。薬の使用が多くなり、その副作用が新たな病気を生じさせてきていることなどです。

けだし、精神療法においては、身体的病気の関連性も言及されるようになり、心理療法、フランクールのロゴセラピー、トランス・パーソナル療法、ジャン・ポール・サルトルのやすらぎ療法、ホメオパシー療法、エリスの論理療法、キャロラインの直観療法などが推進されてきています。これは歓迎すべき兆候といえます。しかし、そこにはまだ、足りないものも見られるのです。それは「霊的」とは、平和な安らぎの感情をもたらしさせるもの、人生の意味を見い出させるものといえましょう。私は宗教者ですから「霊的なもの」とは「宗教でありカトリックの信仰である」と確信しています。ホリスティック協会は科学の団体ですから、宗教とは表示せず「霊的」と表示させています。

協会は、こうホリスティック医学療法を定義しています。

「1 ホリスティック医学療法とは、ホリスティック（全体的）な健康観に立脚する一即ち、生命を『身体・心・気・霊』等の有機的統合体と捉え、社会・自然・宇宙との調和にもとづく包括的、全体的な健康を実現させることを、目指す。

2 ホリスティック医学療法は、自然治癒力を癒しの原点におく。

3 ホリスティック医学療法は、患者が自ら癒し、治療者は援助するというスタンスを取る。

4 ホリスティック医学

療は、様々な治療法を選択・統合し、最も適切な治療を行うものとする。

5 病の深い意味に気づき、自己実現を目指すことを、目的とする。

この 捉え方は、今後のカトリックの宣教の方法論に、示唆を与えるものと思えます。

3 台湾の慈濟功德会の動き

みなさんは、台湾の釈證嚴法師という仏教の尼僧の方を御存知でしょうか。ノベル平和賞候補にも挙げられ、台湾のマザー・テレサと謂われています。一九三七年生まれで、今七十五歳。一九六五年に尼僧になられ、一九六七年に慈濟功德会を創立され、慈善活動こそ信仰の実践であるとして、活動を進められてきました。はじめ五人の尼僧と三十人の在家信者でつくったグループが、現在、台湾の人口の五人に一人、五百万の在家を擁する世界組織となり、日本における東日本及び阪神大震災に対する救援、あるいは国内外の被災地に「医療団五十人をボランティアで派遣する」という活動を見えています。

この団体が、医療・看護活動と信仰を結合させ、全世界的に発展を見せているのです。台湾東部の花蓮に

庵を造られて修業されていた法師は、貧しい原住民のお母さんが子供が重病になつていたにもかかわらず、お金がないので、この病院も見てくれない光景を見て、お金がなくとも看てもらえる病院とシステムを作ることの必要さを痛感しました。以後十数年、協力を呼び掛け、その輪は広がり、花蓮に慈濟病院、看護大学、そして文部省を動かして総合大学を創設するに至らせたのです。この病院に、国立台湾大学医学部の教授医師も給料が二分の一、あるいは三分の一に減つても、来られたとのこと。それだけの信仰心の実践の力を、證嚴法師は引き出したのです。

宗教の実践は「慈愛」と「心の浄化」であるというのが證嚴法師が功德会を創立して以来（四十五年間）の変ることのない信念です。その実践は四代功業として具体化されています。「貧民救済」「病人救済」「教育による宗教心の教化」「宗教心を文化として世界に浸透させる」ことの四つです。

なぜ、慈濟功德会が発展し、世界各地の被災地に救援活動を行えるまでの団体になれたのか、そのことを日本の宗教界は注目すべきであるように思うのです。以前、台湾で働いていた時に、證嚴法師にお目にかかったことがあります。その透き通り、澄み切ったお顔とほほえみ、そして堅固な意志を秘めた口元は、とても印象的でした。

證嚴法師の霊性と慈濟功德会の歩み、そこからカトリック教会は、多くのものを学べるように思うのです。が、どうでしょうか。